

月刊

地域保健



●特集

保健師魂の考現学

一今、保健師は何を目指しているのか

●フロントランナー 樋上 静さん《奈良市保健所健康増進課》

●ピープル 天畠大輔さん《立命館大学大学院》



桶上 静さん

● 奈良市保健所 健康増進課

誠実に、正直に相手に接すること。それが保健師の神髄。
職能向上のためには、保健師同士がつながるしくみをつくるべきです。

奈良市

奈良市の総面積は約277平方キロ、人口約36万人、世帯数は約156万世帯である。2002（平成14）年4月1日から中核市に移行され、市の保健所が設置された。昨年4月には「奈良市保健所・教育総合センター（はぐくみセンター）」として、

JR奈良駅近くの9階建てのビルに移転となつた。古都・奈良の駅前は近代的で、多くのホテルやレストランが立ち並ぶ。車で10分ほど行くと、東大寺、興福寺、春日大社など、日本が誇る歴史ある神社や仏閣をたづぶりと堪能することができる。

今月号のフロントランナーは、奈良市保健所に勤務する34歳の樋上静さん。お伺いした日がなにしろ事業がびっしり詰まつた超多忙の日。のん気に対されたわれわれの周りを、健康増進課の保健師さん、栄養師さんらがビュンビュン駆け回っていた。「いつもこんな感じなんですよ」と樋上さん。めつ

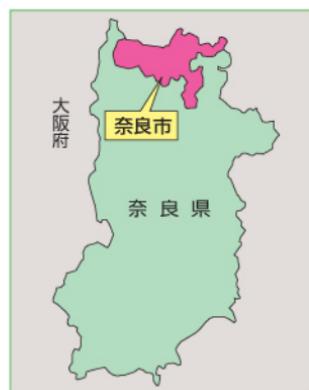
たに目にすることができないが、現場の保健師さんの舞台裏を、垣間見た気がした。

中核市で高齢者と 精神保健に 取り組みたい

樋上さんは大阪市のご出身。最初は看護職を目指し、大阪府立看護大学に入学した。授業でカンファレンスを重ねる中、クラスメートが疾患やケアの仕方について話すのに対し、地域の家族が抱える問題を中心にして自らが抱える問題を話している自分が気がついた。そこで関心領域が地域保健・地域福祉になると確信し、迷うことなく保健師の道に進んだ。大学卒業後の2001（平成13）年には、奈良市に就職。このとき奈良市は、地方分権一括法によって中核市の対象市となり、翌年の中核市への移行、そして市の保健所の設立が決まつていた。

樋上さんは大阪市のご出身。最初は看護職を目指し、大阪府立看護大学に入学した。授業でカンファレンスを重ねる中、クラスメートが疾患やケアの仕方について話すのに対し、地域の家族が抱える問題を中心にして自らが抱える問題を話している自分が気がついた。そこで関心領域が地域保健・地域福祉になると確信し、迷うことなく保健師の道に進んだ。大学卒業後の2001（平成13）年には、奈良市に就職。このとき奈良市は、地方分権一括法によって中核市の対象市となり、翌年の中核市への移行、そして市の保健所の設立が決まつていた。

「2002（平成14）年に奈良市が中核市に移行して保健所ができるまでは、ピヨピヨとヒヨコのように県の保健師さんの後を追つて、幸せな新探時代を過ごしました。当時は、ただただ、毎日が楽しかったような気がします」



今、保健師は何を目指しているのか

保健師魂の考現学

座談会

P18 保健師に求められる視点・使命・役割とは 健康・命・生活を守る専門職として



○司会

岩室紳也さん
(公益社団法人地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター)



佐藤由理子さん
(女川町)



日隈桂子さん
(玖珠町)



山本昌江さん
(所沢市)

かつての保健師の活躍を振り返れば、まさに「保健師魂」という言葉がぴったりくる。そこには地域全体を見る視点、家族を丸ごと見る視点、一人の住民を全人的に見る視点があった。一人の住民も支援から漏らすまいとする情熱と使命感があった。

時代が変わり、今は保健師一人が抱え込んで頑張る時代ではなくなった。業務分担が進み、他の専門職が増え、保健師は地域の健康課題を多職種協働で担い、関係機関につなぐ役割を果たすようになってきた。しかし、業務分担と分散配置の広がりは、家族や地域全体をとらえる視点を弱めているといわれる。目の業務に振り回されて目標ややりがいを見失っている保健師も増えている。今の時代は成果が見えにくく保健師がかつてのような情熱と使命感を持ちにくい環境にあるのかもしれない。

今月の特集は、保健師活動の中で目指している「思い」を語る座談会と、保健師の使命感についての論考を掲載し、今日における「保健師魂」の姿を探っていく。

P44 保健師の「使命感」を考える 今日における保健師魂

◎佐伯和子（北海道大学大学院保健科学研究院）



地域をより深く知り 行動変容に生かしたい

地区組織活動に力を注ぐ3年目のひよこ

しもひらみさ
下村美紗さん

●多気町町民福祉課健康推進係



◀高校生レストランの垂れ幕が目立つ役場前にて。庁舎の屋上には太陽光発電システムを設置している（写真撮影は3月26日）

◎文・写真
西内義雄
(医療・保健ジャーナリスト)

祖父母の入院で 感じたこと

「まごの店」、「相可高等学校」と聞いて「あっ！」と思った人ならこの町のことをご存じのことでしょう。昨年テレビドラマにもなった『高校生レストラン』で知られる、人口1万5000人ほどの三重県多気郡多気町が今回の舞台だ。

ひよこさんは町民福祉課健康推進係に所属する下村美紗さん。2010（平成22）年度採用の24歳。取材は当日にどのような人か分かるのだが、今回は採用当時の町広報紙にリクルートスタイルで緊張した面持ちの顔写真が掲載されていたのを確認していたので、役場に行つてもすぐに見つけることができた。そもそも、役場の正面玄関を入つてすぐの窓口に近い場所に、こちらを向いて座っているのだからよく目立つ。背も高く明るい雰囲気を持つないので、きっと町の人たちも下村さんることはすぐに覚えたに違いない。

「まごの店は高校生レストランの名称。隣には「おばあちゃんの店」がある



▲まごの店は高校生レストランの名称。隣には「おばあちゃんの店」がある

下村さんの出身地はお隣の松阪市。小学校6年生のとき犬を飼い始めた影響か、中学校の職業体験ではペットショップを選び、なぜか「動物の看護師さんもいいな」と思ったのが将来に関する最初の気持ちだった。

高校は地元の進学校に入った。すると、入学してすぐに進路相談する機会があり、早いうちから将来について考へることが多くなり、2年生から文系と理系コースに分かれる際には看護系の大学に入る気持ちを固めている。

「私は両親が働いていて、祖父母も一緒に暮らしていました。昼間はいつも祖父母に遊んでもらい、祖父母のこと立つ。背も高く明るい雰囲気を持つてるので、きっと町の人たちも下村さんにとってはすぐに覚えたに違いない。

病院で闘病する祖父母は、自宅で一緒に暮らしていたときの元気な姿と違い、とても弱々しく、見ていてとてもつらくて、自分に何かできたらいいのにと思う気持ちがありました」

苦しんでいる人のため、何か役に立てるようになりたいとの気持ちが下村さんを動かし、医療にかかる仕事を就きたいとの思いが固まってきた。も